

【「赤松小三郎エッセイ賞」優秀賞】

赤松小三郎と私

山崎 泰

(77歳、長野県安曇野市、無職)

赤松小三郎が暗殺された地、京都市下京区和泉町東院通りの道路の片隅に、ポツンと「贈従五位赤松小三郎先生記念」と刻まれた石碑が立っている。

「ここが小三郎三十七歳の命を閉じた現場か…。悔しくてその死を認めたくなかった弟子たちが「記念」としたという気持ちが分かる気がした…。

暗殺者は人斬り半次郎こと薩摩の中村半次郎、後の桐野利秋。暗殺の下手人は今なおもてはやされ、凶刃に倒れた小三郎はほとんど知られず、何とも口惜しい。

だが私が上田市月窓寺の遺髪塚を墓参した頃、小三郎記念館はなかった。生家跡にも何もなかったが、その後誕生地碑、案内板も立ち、付近は赤松町と名付けられた。そして記念館は上田城内に。少しずつ小三郎の名は広がっている。

私は小三郎を知った時、彼が新しい日本の将来像に確固たる見識を持っていたことに驚かされた。死の数か月前、松平春嶽への建白書でこう提言している。「上下両局の議政局(議会)を創設し、国事はすべてこの議政局で決議する」、その人員は「入札(選挙)ニテ選抽」と。なんと国会の開設を日本で初めて提唱したのだ。

後に出た有名な坂本龍馬の「船中八策」と内容が酷似しており、「龍馬は小三郎の建白書を基にして書いた…」といわれる所以である。

明治時代、信濃毎日新聞の主筆山路愛山は、「信州男児よ、記憶せよ。議会議政治を最初に唱えしは土州人にあらずして信州男児なり。是豈愉快なる事実に非ずや！」と健筆をふるったという。しかしその後今日まで小三郎はあまり知られずにいる。

その責任の一端は私にもある。長野県で高校日本史教師を何十年も勤めていたのに、ついぞ赤松小三郎を生徒に語らなかった。龍馬や桐野は何度か口にしたのに。恥ずかしながら当時私は、小三郎を全く知らずにいたのだ。とうとうと語りたかった、小三郎を。実に実に無念である。

せめて長野県の教師が皆、小三郎を誇らしげに語る、そんな日が来ることを願うばかりである。